

2014年度 A市夏休み親子教室 実施報告

著者	顯谷 美也子, 石田 陽彦, 川崎 圭三
雑誌名	関西大学心理臨床センター紀要
巻	6
ページ	27-32
発行年	2015-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/8987

2014 年度 A 市夏休み親子教室 実施報告

関西大学臨床心理専門職大学院 顯谷美也子・石田 陽彦・川崎 圭三

要約

A 市では、学校生活において何らかの困難を有する子どもたちとその保護者を対象とした親子教室を昨年度から実施している。本稿では全 4 回の教室の様子を報告するとともに、子どもたちの関係性の形成や自己効力感・自尊心の育みについて考察する。最初は固かった子どもたちの表情は回を重ねるごとに柔らかくなり、子どもたちはゲームや自由遊びを通して、主体的に親子教室という場を作り上げていった。自ら遊びや関係性を展開させていくといった経験を通して、子どもたちの自尊心や自己効力感は育まれていったのではないかと考えられた。

キーワード：発達障害、自己効力感、関係性

I. はじめに

近年、発達障害という概念が広く一般的になり、教育現場などでは発達障害を持つ子どもへの対応についての議論が日々なされている。その一方で、その諸特性を所謂“問題行動”としてのみ理解するために適切な支援が行われていないという場合もあるのではないかと筆者は考えている。発達障害を持つ子どもは自信を持つことが難しいとされており、その要因の一つとしては周囲の理解不足が挙げられる（一門・住尾・安部 2008）。では発達障害を持つ子どもたちに対して、我々は一体どのような関わりを行うことが求められているのだろうか。川上（2012）が、発達障害と呼ばれる人たちに対しては人と人との間の関係経験を改めて十分に供給することが必要であると述べているように、人と人との濃い関係性を形成することは発達障害を持つ子どもにとってプラスの効果を発揮することが考えられている。本事業では、ゲームや自由遊びなどを通して子どもたちとスタッフが交流することによって濃い関係性を形成し、

その中で子どもたちの自己効力感や自尊心が育まれていくことを目的としている。本稿では、2014 年度に A 市で実施された親子教室の活動を報告する。

II. 概要

目的：安全で安心できる環境の中、子どもたちがスタッフや他児との交流を経験することにより、自信や社会性の向上を図ること。
日程：全 4 回、各 2 時間の教室を行う。
対象：A 市内の幼稚園や小学校に通う、支援を必要とする園児または児童及びそのきょうだい。

III. 教室の様子

以下に、全 4 回の親子教室の様子を記す。

#1

目的：他児・スタッフとの関係づくり
参加者：15 人



写真1 新聞びりびり



写真2 パズルに取り組む様子

スタッフ：9人

13：00～ 参加者到着

13：15～ あいさつ、名前呼び

13：20～ 新聞びりびり

保護者も参加。新聞を自由に破いて遊ぶ。自由度の高い遊びであるため、子どもたちの緊張を緩和することができると思う。

13：40～ サーキット（キャタピラ、けんけん、ブルーシートくぐり、宝探し）

4つの障害物をクリアしながらゴールを目指す。最後の宝探しでは新聞びりびりで破いた新聞紙の中にパズルのピースが隠されており、全員のピースを合わせると『親子教室』の文字が浮かび上がる。

14：15～ スライムづくり

のりや絵具などを用いて、オリジナルのスライムを作る。

14：50～ フリー

15：00 あいさつ、解散

#1を振り返って

今年度初めて参加する子どもが多かったため、#1では周囲との関係づくりを意識してプログラムや関わり方を考えていった。初めは個人作業であった新聞びりびりも、破った新聞紙を1か所に集めて全員で撒くという作業を通して他児との会話や交流が生まれる場面があった。また

サーキットでは、ピースを手に入れた子どもたちが自然に集まりパズルに取り組む姿が見られ、子どもたちの状況を先読みする力や物事に取り組む主体性を感じることができた。スライムづくりでは子どもたちが隣り合わせで作業をしたことにより、同じもの・同じ場を共有しているという意識付けができたと考えられる。

また集団の中に入ることが難しい子どもに対しては、一対一でスタッフが傍に付き、その子の心の動きやペースに合った関わりを心掛けた。たとえ輪から離れていても、「親子教室」という全体としての大きな枠の中にその子がいるという意識が持てるよう、スタッフは常にその子の存在を意識した動きや声掛けを心掛けた。

#2

目的：チーム遊びで他児を意識する

参加者：13人

スタッフ：8人

13：00～ 参加者到着

13：15～ あいさつ、名前呼び

13：20～ フラフープ通し

保護者も参加。子どもたち・保護者・スタッフを2つのグループに分けて円を作り、フラフープをどちらのチームが先に一周させることが出来るかを競う。

13：30～ ボール運びリレー



写真3 ボール運びリレー



写真4 新聞プール

子どもたちを2つのチームに分けて実施。板の上に小さなボールを乗せてバランスを取りながらコースを進み、次の人にバトンタッチする。

13:45～ 色おに

様々な色のエリアを床に作り、おにが言った色のエリアに移動する。1つしかエリアがない色もあり、全員乗るためには協力し合うことが必要となる。

14:00～ 進化じゃんけん

じゃんけんをして、「たまご」「ひよこ」「にわとり」の順番で勝った人から進化していく。

14:15～ 傘袋ロケットづくり

空気を入れた傘袋に羽やおもりをつけ、ロケットを作る。作った後はそれをみんなで飛ばして遊ぶ。

14:45～ フリー

15:00 あいさつ、解散

#2を振り返って

前回、新聞びりびりのような感覚遊びが子どもたちの中にスムーズに入っていった様子が見受けられたため、今回は最初から新聞プールを設置しておき、プログラム外で子どもたちが自由に遊ぶことができる時間を作った。前回輪に入ることが難しかった子も、今回はその新聞プールでスタッフや他児と関わることができていた。難しいルールなどのない感覚遊びを入れる

ことによって、子どもたちの緊張や抵抗を低減させることができたのではないかと考える。

また今回は、床に貼ったビニールテープを使って休憩時間に自然にじゃんけんレースが始まるなど、子どもたちが主体的に遊びを作っていくという行動が見られたことから、子どもたちが受動的ではなく能動的にこの親子教室に参加している様子がうかがえた。休憩時間を子どもたちが目一杯楽しんでいる様子が見受けられたため、子どもたちの様子を見ながら自由時間を多く取るなど、子どものペースに合わせたプログラム進行を心掛けた。子どもたちの関係性も初回より深まっている様子で、自然と会話が生まれる場面や一緒に遊ぶ場面が多く見られた。

#3

目的：感覚遊びを用いて他児と関わりを持つ

参加者：10人

スタッフ：8人

13:00～ 参加者到着

13:10～ あいさつ、名前呼び

13:15～ ふうせんバレー

保護者も参加。4つのグループに分かれて円になり手をつなぐ。指定された時間風船を落とさないようにパスし続ける。

13:25～ マラカスづくり・リズム遊び

ペットボトルにビーズやストローなどを入れて



写真5 風船バレー

自分だけのマラカスを作り、作ったあとは音楽に合わせて自由に演奏する。

14:10～ シャボン玉

ハンガーやロープで作ったワクを使い、巨大なシャボン玉を作る。

14:45～ フリー

15:00 あいさつ、解散

#3を振り返って

#3ではリズム遊びや風船遊びなど、音や触覚を使って楽しめる遊びを中心とした。マラカスづくりでは、ペットボトルや中に入れるビーズなどをすべて子どもたちに選んでもらい、「自分で作った」という感覚を強く持てるようにした。またシャボン玉では、大きなワクを使って巨大なシャボン玉を作ろうと子どもたちが力加減や液の付け方などを試行錯誤する様子が見受けられた。誰かが大きなシャボン玉を作れた時などは子どもたちから歓声が漏れ、場の一体感を感じることができた。時間内に上手く大きなシャボン玉が作れず落ち込む子に対しては、他の子どもたちが部屋の中に入ったあとに、スタッフとともに作れるまで挑戦するなど、一人ひとりの子どもの中に成功体験が残るように心がけた。

#4

目的：子ども自身が遊びを展開する

参加者：10人

スタッフ：8人

13:00～ 参加者到着

13:15～ あいさつ、名前呼び

13:20～ まえ・うしろゲーム

保護者も参加。全員で手をつないで大きな円を作り、スタッフの掛け声とともに前・後ろ・右・左に移動する。

13:30～ 輪投げゲーム

子どもたちを3つのチームに分けて実施。スタッフがポーズを取り、子どもたちはスタッフの手や足に輪投げの輪を引っ掛ける。

14:00～ 水鉄砲づくり・水遊び

ペットボトルに絵を描き、水鉄砲を作製。その後その水鉄砲を使い、的当てなどをして遊ぶ。

14:40～ フリー

15:00 あいさつ、解散

#4を振り返って

#4では、比較的ルールの少ないゲームを入れることや自由時間を多く取るなど、子どもたち自身が遊びを展開していける環境づくりを心掛けた。ルールなどのきっちりとした枠がない中で子どもたちは特に不安を感じる様子もなく、



写真6 水遊び



写真7 自由時間の様子

自由に遊びを提案していく姿が見受けられた。スタッフは子どもの提案がこの場で実現できる形になるようサポートし、安全に遊ぶことができるように配慮した。また輪投げでは、これまで集団に入ることが難しかった子どもが初めて他児の中に入ってゲームに参加することができた。無理に集団に入れようとするのではなく、その子の興味や関心の向かう方向にスタッフがとことん付き合い続けたことで、親子教室という場に少しずつ安心感を感じることができていった結果なのではないかと考える。

IV. 総括

今年度の親子教室は前年度に比べて参加者が多くなったため、スタッフの数も増やし、しっかりと安全管理などの対応に当たることができるようにした。スタッフの数が増えたことにより、集団から外れた子どもに対しても十分に個別の対応を取ることができ、一人ひとりの子

もたちのペースに合わせたプログラム進行が可能になった。また個別対応の際には無理に集団に戻すような関わりをするのではなく、その子の気持ちをひとつひとつ丁寧にくみ取る作業を行うことを心掛けた。今回集団に入りにくく個別対応を取っていた参加者に関しては、回を追うごとに少しずつ集団に近づいていき、最終回には他児の中に入ってゲームに参加するという一連の変化が見られた。気持ちの変化に寄り添いながらその子のペースに合わせた対応を取ったことによって、この場が安心できる場だという感覚が芽生えたからこその変化だったのではないかと考える。今年度初めて参加する子どもも多くいたが、スタッフを介して子どもたち同士が関わる機会も多く、全4回の教室の中で子どもたち同士の関係性も深まったようであった。

教室の中では、ゆったりとした雰囲気の中で子どもたちが自由に生き活きと遊ぶ姿が非常に印象的であった。しかし細かいルールがあるゲームなどでは衝動性を抑えきれずに思うまま行動してしまい、子どもたち同士がぶつかる場面も何度か見受けられた。新聞びりびりや風船遊びなどの、感覚的で衝動性を発散できるような遊びが子どもたちにはフィットしたようである。前年度と違う点としては、制作などのメインのプログラムの他にサブプログラムとして小さなゲームをいくつか用意し、子どもの様子に合わせて順番を入れ替えることができたようにした。プログラムに合わせて子どもを動かすのではなく、子ども一人ひとりの関心や興味の変化を追いながら、プログラムの方を子どもに合わせて柔軟に変更していくという姿勢を心掛けた。そのことによって子どもたちの中に場に対する安心感や自由感が芽生え、結果として子どもたちが主体的に親子教室という場を作り上げていくことに繋がったのではないだろうか。今回は、こちらが提示したプログラムだけでなく、子どもたち自ら遊びを展開していく姿が多く見られた。もちろんそうした中では子ども同士の衝突や意見の相違も起こったが、他児を意識し、関

わり、正面からぶつかったというその経験は、子どもたちにとって非常に重要なものであったように思う。

前年度からの参加者については、1年を通しての個人の変化や成長を感じることができた。同じ地域に住む子どもたちやその親同士が繋がる場となること、そして長期的な視点から支援を行えるということが、この親子教室の特徴の一つであると考え。今後もこの親子教室が、“繋がり場”として継続していくことを期待する。

文献

- 一門恵子・住尾和美・安部博史(2008)軽度発達障害児・者の自尊感情について—自尊感情尺度(SE尺度)および熊大式コンピタンス尺度を用いた検討—,九州ルーテル学院大学紀要, 37, 1-7.
- 川上範夫(2012)ウニコットがひらく豊かな心理臨床—「ほどよい関係性」に基づく実践体験論, 明石書房.